

『仮名手本忠臣蔵』に使われたことわざの韓国語訳 —直訳戦略とその形式—

Translating Japanese Proverbs in “Kanadehon Chushingura”(The Treasury of Loyal Retainers) into Korean: Strategy of Literal Translation and Patterns

高 永珍

要 旨

本稿は、『仮名手本忠臣蔵』の韓国語訳における翻訳戦略とその形式を、長年蓄積された文化の産物としてのことわざの翻訳に着目し、その韓国語訳を分析したうえで分類し、その特徴を考察したものである。分析の結果、翻訳の傾向は直訳を主なスタンスとし、多様な形式を試みていることが明らかになった。その翻訳戦略の様相として、「直訳」の形式、「直訳+表現の変換」の形式、「直訳+表現の追加」の形式、「その他」の形式に分けられる。まず「直訳」の形式は、それに相応する韓国語のことわざを使わず、忠実に直訳した韓国語訳によって文脈から読み取る方法を取っている。次に「表現の変換」では、原典の名詞を述語句に変える例と、原典の固有語を韓国語の固有語に変える例が多く、自然な韓国語にしようとする工夫が見られる。そして「表現の追加」では、原典の前後文脈を説明する表現、副詞、擬態語を追加して文脈を鮮明にし、原典で省略されたことわざの部分の補って文脈を強調した。また「その他」は、訳注や括弧に説明したり、挿絵や四字熟語、引用記号を入れるなどの工夫を用いて、直訳しながらも読みやすく訳そうとしている。最後に、ことわざを含む原典の韓国語訳において困難な掛詞に関する例を考察し、韓国語の表現の選択と追加によって、訳文で韓国語同士が掛詞の修辞をなし、訳文の魅力を増加させている例を確認した。これは、訳者の翻訳戦略と形式の可能性及び重要性を示唆している。

キーワード

日本語 韓国語 ことわざ 翻訳戦略 翻訳形式 直訳

1 はじめに

近年、とりわけ2000年以降、韓国では日本古典文学の翻訳や研究が盛んである。鄭ヒョン(2013)によれば、韓国における日本古典文学作品の翻訳数(複数翻訳を含む)は、2000年以前には16編だったものの、2000年以降は59編に急増し、調査された2013

年現在では75編の日本古典文学が翻訳されているという¹。同氏はその原因を、90年代に始まった韓国研究財団の翻訳支援事業と日本古典文学関連博士学位取得者が増加したためと言及した。筆者の専門である近世芸能の分野では、『仮名手本忠臣蔵』（『47인의 사무라이 [47人の侍]』高麗大学校出版社、2007年）と『曾根崎心中』（『소네자키 숲의 정사 [曾根崎森の情死]』高麗大学校出版社、2007年）がいずれも崔官²によって翻訳されている。

前者の、寛延元年（1748年）8月14日大坂竹本座で初演された『仮名手本忠臣蔵』（竹田出雲、三好松洛、並木千柳の合作）は、「赤穂事件」を基盤にしてつくられた一連の作品群（「忠臣蔵物」）の集大成として挙げるができる。筆者は、同志社大学で留学生や韓国語上級学習者を対象にした講義の「日本の伝統と芸能」において、『仮名手本忠臣蔵』とその韓国語翻訳版『47인의 사무라이 [47人の侍]』を対比講読している。その際、多くの問題点に直面してきた。その中でも特に掛詞、縁語、比喩表現、慣用句、歴史や文化にかかわる固有語などは直訳が難しく、翻訳困難な表現に遭遇した。

日本語と韓国語の翻訳に関する研究は、未だ総論といえる成果はなく³、言語学の対照研究⁴などが主な研究だった。近年、翻訳学からアプローチする研究⁵もあるが、掛詞、縁語、比喩表現、慣用句、固有語の翻訳研究や古典作品の翻訳研究、ましてや古典劇の翻訳に対する研究はない⁶。したがって、本稿では、掛詞や縁語などの修辞と、比喩表現、慣用句、固有語を多く含み、総合的に考察できる『仮名手本忠臣蔵』におけることわざの韓国語訳を取り上げ、本作のことわざの韓国語訳の分析を行う。それに加え、翻訳の戦略とその形式、訳の特徴を考察する。本稿の調査分析や考察が、今後多くの訳者による多様なバージョンをなす際、精巧かつ正確な訳の布石になることを願う。

2 先行研究と調査資料

先述のように、『仮名手本忠臣蔵』における韓国語訳に関する先行研究はない。しかし、参考としての他の言語における『仮名手本忠臣蔵』の翻訳については先行研究がある。

山本（2001）によれば、『仮名手本忠臣蔵』の七段目の英訳と仏訳の両訳を分析した結果、ドナルド・キーン⁷の英訳は「戯曲スタイル」の体裁を取っており、ルネ・シフェールの仏訳は、台詞にダッシュ記号を入れてはいるが、語り物としての『仮名手本忠臣蔵』を重視するスタンスが窺えるという⁷。また岩上（2015）は、ディキンズの英訳の経緯からその特徴を探っている⁸。同氏によれば、研究者であったディキンズの訳に対する姿勢は、「原典に近づけた形で訳出」するため、「正確な翻訳をめざし」ている。この二つの研究は、体裁からの翻訳姿勢に関して示唆するところが多い。英訳に限って言えば、舞台芸術である人形浄瑠璃の作品として『仮名手本忠臣蔵』を訳したドナルド・キーン⁷の英訳と、語り物の原典により近い形で訳したディキンズの英訳とが存在し、英語圏の読者はスタイルを選ぶことさえできる。『仮名手本忠臣蔵』の韓国語訳を見れば、ディキンズの英訳と同様、日本の近世文学の研究者による脚注や挿絵、扉絵、解

説が付されているのはもちろんのこと、語順が同一という日本語と韓国語との関係性から、原典に近い直訳の体裁と言える。

本稿で扱う資料として『仮名手本忠臣蔵』の原典は、最近の研究や注釈成果を入れた長友千代治の校注・訳の『新編日本古典文学全集 浄瑠璃集 仮名手本忠臣蔵・双蝶蝶曲輪日記・妹背山婦女庭訓・碁太平記白石嘶』(小学館, 2002)を底本とした。原典の引用は、ルビと節章を省略し、括弧に底本のページ数を入れた。そして韓国語訳書は、崔官による『일본명작총서 1 47인의 사무라이 [日本名作叢書 1 47人の侍]』(高麗大学出版, 2007年)である。韓国語訳の引用は、同書により、筆者が韓国語訳を日本語に直訳し、括弧に韓国語訳の底本のページ数を記入する。また同書の凡例には、韓国語訳の底本として『日本古典文学大系 浄瑠璃集 上』を利用したことが確認できる⁹。

3 直訳の分析

ことわざの定義について『日本語学キーワード辞典』では、「民衆が経験から得た生活上の知恵・知識を簡潔に表現したことば」とし、「広義には格言をふくめてことわざとよび、慣用句、俗信などもことわざにふくむことがある」としている¹⁰。『仮名手本忠臣蔵』のことわざを考察するため、注釈書¹¹の比較検討をし、原典に表れることわざを底本から抽出した結果、複数出現する例を含む99のことわざがあった。それらがことわざの定義に当てはまるかどうかについて、広義のことわざと同様の基準で約43,000項目を収めた『故事・俗信ことわざ大辞典』¹²を利用し、ことわざの解説を確認した。さらに、本稿において必要な場合、上記の注釈書の解釈を本論で紹介する。その上で、原典のことわざの韓国語訳の箇所を韓国語訳の底本から抽出し、原典のことわざと韓国語訳とを比較検討した結果、その6割が直訳と変化・追加などの工夫をした直訳の形式であった。韓国語訳全体の形式とその分類を行い、「訳の形式」として以下に記し、詳しい考察は各節で行う。なお、本稿で検討する韓国語のことわざや慣用句の意味は『표준국어대사전 [標準国語大辞典]』¹³による。

直訳Ⅰ - 1 「直訳」	15 訳例
Ⅰ - 2 「直訳 + 表現の変換」	19 訳例
Ⅰ - 3 「直訳 + 表現の追加」	9 訳例
Ⅰ - 4 「その他」	23 訳例
意識Ⅱ - 1 「意識」	18 訳例
Ⅱ - 2 「意識 + 主語挿入」	5 訳例
Ⅱ - 3 「韓国固有語で意識」	11 訳例
省略Ⅲ	4 訳例

『仮名手本忠臣蔵』のことわざを韓国語訳した訳例の具体的な内容を記せば、全例は延べ104例であり(調査例99、重複形式を含む)、そのうち66例は「直訳」の形式であった。そして34例が「意識」の形式であり、残りの4例が「省略」の形式だった。2～4回の重複することわざもあるが、文脈と修辭などで相違もあるため、一つの訳例として分析を行った。分析結果から『仮名手本忠臣蔵』のことわざの韓国語訳は、翻訳戦略として直訳を選んだと言える。

本章では、韓国語訳の翻訳戦略だった直訳に焦点を合わせて考察するため、他の形式の代表的な例をここで少し紹介する。まず「意識」の形式として、原典の「青海苔もらうた礼に、太々神楽を打つやうなもの。」(p.93)を、韓国語訳では「아주 작은 것을 받은 답례로 터무니없이 큰 것을 주는 것과는 같은 일 [とても少ないものをもらった返礼として、途方もなく大きいものをあげることと同じもの] (p.122)」と訳している。そして「省略」の形式として、原典の「御前よきまゝ出るまゝに、杭とも思はぬ言葉の大槌、打ち込まれてせき立つ色目、塩谷引つ取つて」(p.15)を韓国語訳では「주군의 총애를 믿고서 제멋대로 굴며 큰소리를 친다. 자기를 무시하는 소리에 모모노이 와카사노스케가 발끈하여 화난 눈을 하는 것을 연야 한간이 눈치채고는 나서서 [主君の寵愛を信じて勝手に行動し大きな声を出す。自分を無視する声に桃井若狭之助がかつとなり、怒った目をするのを塩谷判官が気づいて] (p.16)」と訳している。

3.1からは、「直訳」とその特徴、そして「直訳」の形式を分類し、各分類の特徴について述べる。また、「直訳」とその形式では、どのように訳されているかについても考察することにする。

3.1 「直訳」の形式とその特徴

日本語と韓国語はともにSOV語順の言語で、助詞を有する膠着語であるため、多くの共通点を持っている。その上、同じ漢字文化圏であり、地理的かつ文化的な近さもあり、「五臓六腑(오장육부 (p.72, p.143))」(p.56, p.107)や「血の涙(피 눈물 (p.88))」(p.67)、「金が敵(돈이 원수 (p.89))」(p.69)のような両言語に相応することわざがあるため、直訳が可能であった。「嘘から出た真(거짓에서 나온 진심 (p.136))」(p.102)、「命・子ゆゑに捨つる親心(목숨을 자식을 위해 버리는 부모의 마음 (p.172))」(p.126)、「泥中の蓮(진흙 속의 연꽃 (p.193))」(p.140)なども同様と言える。

以上のような共通点とことわざの韓国語訳の分析からも分かるように、『仮名手本忠臣蔵』の韓国語訳者は、なるべく直訳することを方針として訳されたことが分かる。例えば、「鯛ひ鯛ふ犬に手をくはるゝ」(p.80)については、「믿는 도끼에 발등 찍힌다 [信じていた斧で足の甲突き切られる]」という韓国語の類似したことわざがあるにもかかわらず、「기르던 개에 손을 물리다니 [飼っていた犬に手をかまれるとは] (p.104)」と直

訳している。この訳文は、韓国の読者に馴染みがないが、「信頼した者に裏切られる」という意味は文脈から読み取れる。即ち、日本語のことわざを活かした訳で、原典を尊重した姿勢が垣間見える。『改訂版日韓類似ことわざ辞書』¹⁴にも「飼い犬に手をかまれる」は、「믿는 도끼에 발등 찍힌다」に相応するとある。また「壁にも耳あり (벽에도 귀가 있으므로 (p.105))」(p.140)は、「밤말은 쥐가 듣고 낮말은 새가 듣는다 [夜の言葉は鼠が聞き、昼の言葉は鳥が聞く]」に相当し、「蛙の子は蛙になる (개구리 자식은 개구리가 된다 (p.124))」(p.169)は、「콩 심은 데 콩나고 팥 심은 데 팥난다 [豆を植えたところに豆が出て、小豆を植えたところに小豆が出る]」に相応する。にもかかわらず、『仮名手本忠臣蔵』の韓国語訳では、文脈から意味を推測できる表現だと判断し、原典の直訳をしている。また、「蚤の頭を斧で割つたほど (벼룩의 머리를 도끼로 쳐 나눈 정도로 (p.93))」(p.122)は、敵討ちを諦めたと騙すための放蕩ぶりを見せる由良之助が、「少し」は無念と思う気持ちを喩えとして使ったことわざだが、韓国の類似したことわざに「벼룩의 불알만하다 [蚤の金玉ほどだ]」や「새 발의 피 [鳥の足の血]」があっても、原典のことわざを忠実に直訳していることが分かる。以上のような4訳例から、訳者は翻訳の際、対応できる韓国のことわざを使用せず、その意味は文脈から推測可能と判断した上で原典を重視する方針で直訳している。さらに、「七度尋ねて人疑へ (일곱번 묻고 나서 사람을 의심하라 (p.77))」(p.100)も、「人を疑う際は慎重であれ」という意味として文脈から読み取れる。

原典を直訳するにあたって、原典や日本のことわざの意が損なわれる訳例もある。7段で師直の側に寝返った斧九太夫に久しぶりに会った由良之助は、「額にその皴伸ばしに (이마의 주름을 퍼려고 (p.95))」(p.126)遊郭に来たかと冗談をいう。ここでは、「息抜きをする。うさばらしをする。」という意味のことわざ「皴を伸ばす」が、韓国の直訳ではその意味は表れず、遊郭に来た目的という文脈で「遊びにきた」という意味を推測する程度であろう。韓国語で「이마 주름 [額の皴]」といえは、「怒った印象」や「年齢より年老いた印象」という意味で使うが、「퍼다 [伸ばす]」と対をなしては使われない。もう一例として、「患はぬやうに灸据ゑて」(p.78)は、「아프지 않도록 뜸을 뜨고 [患わないように灸を据えて]」(p.101)と訳し、患わないように「(自分を)きびしく叱る」という意味は表れず、本来の灸を据える治療などと解釈して訳したのである。上記の2例は、訳者の原典の解釈とも関係しており、意識や説明を加える必要があったと思われる。

以上のように、『仮名手本忠臣蔵』の韓国語訳は、対応できる韓国語のことわざがあろうとも、原典の意味が伝わりにくかろうとも、なるべく直訳しようとしている。しかし、原典のまま直訳したとされる「I-1直訳」の訳例は、15例のみだった。語順が同一で、多くの共通点を有していても、直訳には限界があった。では、残りの直訳はいかに訳したのだろうか。3.2では、直訳しつつも変化を加えた翻訳の戦略について詳しく考察する。

3.2 直訳戦略 (1) 一具体化としての「表現の変換」

直訳をしながら変化を加えた韓国語訳は、「表現の変換」と「表現の追加」、「その他」の形式の3つに大別できる。まず、直訳における「表現の変換」について述べてみよう。加古川本蔵の妻の戸無瀬と娘の小波とが許嫁の力弥を訪ねてくる9段目で、由良之助の妻お石は代わって、「追従武士の禄を取る本蔵殿と。二君に仕へぬ由良之助が大事の子に。釣り合はぬ女房は持たされぬ」(p.118、下線はことわざなど考察において注目する部分で筆者による。以下、同様である)と、離縁を言い渡す。この箇所韓国語訳は、「아침하여 무사의 봉록을 받고 있는 혼조 님. 두 주군을 섬기지 않은 유라노스케의 소중한 자식에게 어울리지 않은 아내를 갖게 할 수는 없지요 [へつらって武士の俸禄をもらっている本蔵様. 二人の主君に仕えない由良之助の大事な子息に似合わない妻を持たせるわけにはいきません] (p.161)」で、「二君」を「두 주군 [二人の主君]」に訳している。ところが、「二君に仕へぬ」はもう一か所で使われ、戸無瀬が由良之助と力弥の決心を知り、お石への気持ちを述べる際にも用いられる(「御主人の仇を討つて後. 二君に仕へず, 消ゆるといふお心」(p.127))。その韓国語訳では、「주군의 원수를 갚은 다음에 다른 주군을 섬기지 않고 사라진다는 그런 마음 [主君の敵を討つた後, 異なる / 違う主君に仕えなく消える / 死すというそんな気持ち] (p.173)」と訳し、「二君」を「다른 주군 [異なる / 違う主君]」としている。即ち、同じことわざの「二君」が、韓国語訳の二か所では、「두 주군 [二人の主君]」と「다른 주군 [異なる / 違う主君]」とになっている。

まず、「다른 주군 [異なる / 違う主君]」という韓国語訳は、「二君」という漢字語を述語句に訳している。それは、前節の「御主人」を韓国語訳では「주군 [主君]」と訳したため、自然な韓国語の文章にするには必要な表現の変換であった。このような名詞や名詞句を述語句に訳した形式は、多数見受けられる。

「人は一代、名は末代 [사람은 일대一代지만 이름은 언제까지나 남는 법 (p.18)]」(p.16)では、「末代」が「언제까지나 남는 법 [いつまでも残るもの]」と述語句に訳されている。『표준국어대사전 [標準国語大辞典]』には、「말대 [末代]」が掲載され、「遠い後代」の意が付されている。しかし、その語を韓国語訳では用いなかった。それは、より自然な韓国語にするためだったと思われる。なぜ「人」は、韓国語訳で漢字を併記した「일대一代」で対応でき、「名」には「말대末代」に対応できなかったかは、疑問として残る。ただ、韓国語のことわざの「호랑이는 죽어서 가죽을 남기고 사람은 죽어서 이름을 남긴다 [虎は死んで皮を残し、人は死んで名を残す]」という慣用句の影響の可能性はある。韓国語の慣用句として、「이름 [名]」は「남기다 [残す] / 남다 [残る]」と結びつく。つまり、訳者の母語である韓国語の慣用句の干渉であると見て取れる。

また「大功は細瑾をかへりみず」(p.95)は、「큰 공을 세우려는 사람은 사소한 일은 상관하지 않는다고 하던데 [大きな功を建てようとする人は些細なことに関わらないというが]」(p.126)」と訳し、「大功」と「細瑾」は上記の述語句に変えている。「대공 [大功]」と「세근 [細瑾]」とは韓国語にも漢字語としてはあるが、その意味が「대공 [大功]」は「大

きな功績]、「세근 [細瑾]」は「些細な過ちや失敗」であるため、文脈が忠実に伝えられず、説明する形の述語句に変えているのである。続いて「夜目遠目なり、字性もおぼろ」(p.100)は、「밤인데다가 멀어서 글씨가 또렷이 보이지 않는다 [夜であるうえ、遠くて文字がはっきり見えない] (p.132)」と訳している。原典では、「夜目遠目笠の中」ということわざの一部を利用した修辞であり、「はっきり見えないので、実際より美しく見える」という意味は表れず、本文の文脈での「夜で遠いので」見えないという意味のみで、語り物の浄瑠璃のリズムが活かされた修辞である。韓国語訳も同様で、「夜で遠いので」という状況を説明する述語句に表現を変えているが、もちろん韓国語訳では原典のリズム感を表せないのは当然である。語り物の浄瑠璃の翻訳の難しさの一つといえる。

そして「浮木にあへる盲亀はこれ」(p.157)は、「눈 먼 거북이가 부목을 만나고 [目がくらんだ/つぶれた亀が浮木を(に)会って] (p.217)」と訳されている。ここでは、「盲亀」を上述した例と同様に、漢字語の意味伝達と自然な韓国語にするため、「目がつぶれた亀」と述語句に訳している。

同様の述語句に訳した例は、8段の道行の箇所にもある。語り物の道行という節事(景事)は、掛詞や縁語などの修辞が多く、最も翻訳が難しい箇所である。

うれしいやら、案じて胸もおほろ川. 水の流れと人心. もしや心は変らぬか. 日陰に花は咲かぬかと. いうて (p.109)

기쁘기도 하여 가슴이 팍 차오른다. '이 큰 오이가와大井川 (시즈오카현을 흐르는 강) 강물처럼 흐르는 것이 사람의 마음, 혹시 리키야의 마음은 변하지 않았을까? 그늘에 쫓은 피지 않았을까?' (낭인이 된 리키야에게 다른 여자가 생기지 않았을까?) 라고 생각하며 (p.149)

力弥想いの小波の胸を「覆う」と「大井川」を掛けた修辞は韓国語には訳すことができず、「기쁘기도 하여 가슴이 팍 차오른다 [嬉しかったりもして胸がいっぱいに膨らみ満ちる]」と文章を締めくくり、韓国の間接引用記号「」で心情を述べる訳に変えている。「水の流れと人心」は、「이 큰 오이가와大井川 (시즈오카현을 흐르는 강) 강물처럼 흐르는 것이 사람의 마음 [この大きい大井川 (静岡県を流れる川) の川水のように流れるのが人の心]」と訳したが、利用したことわざは「水の流れと人の末/身の末/身の行方」で、「人生の定めがたいこと、前途のわからないこと」という意味を持つが、原典では「人心」とし、韓国語訳もそれに合わせて訳している。しかし、原典では「水の流れ」と「人心」は、助詞の「と」でつなげ二つが同様だと述べているのに対して、韓国語訳では、「川水のように流れるのが「人の心」と、「人の心」に重きを置くような訳になっている。

最後に「猿が人真似」(p.94)は、敵討ちのお供を願う平右衛門が由良之助に嘆願する場面で使われ、人がなんと言おうが構わない、あるいは謙遜する態度とも解釈できる。それは、原典が体言止めであるため(名詞句)だが、韓国語訳では「원숭이가 사람을 흉

내내는 것 같겠지만 [猿が人を真似することのようだが] (p.123) という逆説として述語句に訳し、「お草履をつかんでなりとも. お荷物をかついでなりとも. 参ませう (하인으로 짚신을 들고라도 짐을 짊어지더라도 참가하겠습니다 [下僕として草鞋を持ってでも荷物を背負ってでも参加いたします])」とお願いをする原典につなげて訳している。

日韓対照言語学の先行研究では、日本語は「名詞志向構造」を持ち、韓国語は「動詞志向構造」を持つと指摘されている¹⁵。以上のような7例は、日本語と韓国語の特徴を活かし、直訳に名詞を述語句に訳するという「表現の変換」を加えた形式といえる。なお、掛詞の韓国語訳は、他のことわざの例にも見られるため、3.5で詳しく述べる。

もう一つの「二君」を、「두 주군 [二人の主君]」と訳した例は、直訳しつつ語句を変換した形式であるといえる。この形式には、漢字語から固有語や他の漢字語に変える訳、また固有語同士の変換もある。語句の変換の形式を分類すると、次のようになる。

①漢字語を固有語に変える	1例
②漢字語を他の漢字語に変える	2例
③固有語を漢字語に変える	2例
④固有語を他の固有語に変える	6例
⑤助詞を他の句に変える	1例
⑥原典をことわざの語順に合わせて変える	1例

大序の手出しである「嘉肴ありといへども、食せざればその味はひを知らずとは」(p.13) は、「“산해진미가 있어도 먹어 보지 않으면 그 맛을 모른다” 라는 말이 있다 [「山海珍味があろうとも食べてみないとその味を知らない」という言葉がある] (p.11)」と一部の表現を変えて直訳している。「嘉肴」は韓国語の漢字語の「가요 [嘉肴]」が存在するが、文脈でその意味がわかったとしても、語句自体は伝わりにくい。そのため、韓国語訳では、「いろんなところで獲れた珍しいもので作った、味の良い料理」という意味の漢字語の「산해진미 [山海珍味]」という表現に変更して訳している。また、上記の「味はひ」も、韓国語訳では「맛 [味、うまみ]」という固有語に変えて訳している。この訳例では、直接引用記号や訳注も使用されたが、それについては、3.4の「その他」で扱うことにする。

「嘉肴」のほかに漢字語を他の漢字語に変えた語句変換の直訳の例は、「砂の中の小金 (모래 속의 황금 [砂の中の黄金] (p.193))」(p.140) のみで、語句変換として最も多いのは、日本語の固有語を韓国語の固有語に変えた訳である。

「無念. 骨髓通つて忘れがたし」(p.54) は、「원통함이 골수에 사무쳐 잊혀지지 않습니다 [冤痛さ / 恨みが骨髓に沁み込んで / 徹して忘れられません] (p.69)」と訳された。ことわざの「恨み骨髓に徹する」を利用した修辞で、原典では「無念」だが、韓国語訳にも「恨み」が共通して認識されるのが興味深い。しかし、「深く貫く、入る」という意の「徹

する / 徹る」は、韓国語訳では「深く沁みこんで遠くまで及ぶ」という意味の固有語「사무치다」と訳されている。韓国語の「사무치다」は、慣用句として「마음 [心]」、「가슴 [胸]」、「뼈 [骨]」、「골육 [骨肉]」と句をなす例が多いが、「골수 [骨髄]」の例も少ないが見られる。この訳例は、原典のことわざを、韓国語の慣用句の語句（固有語）に変換し、自然な韓国語の文章にしている。

同様の例として「影も形も見えぬ」(p.71)は、「그림자 코빼기도 보지 못했구나 [影、鼻も見えない] (p.92)」と訳し、韓国語の慣用表現にして、「形」を「코빼기 [鼻の俗っぽい語]」に語句を変えて訳した。これもまた韓国語の自然な文章にするための工夫であろう。

また「蚤にもくはさぬこのからだ」(p.64)は、「벼룩에도 물리지 않도록 자중하고 있다네 [蚤にも噛まれないように自重しているのだ] (p.84)」と訳する際、原典の「食われる」を、訳では「물리다 [噛まれる]」と語句を変換した。それは、日本語では、虫などに「刺される」や「食われる」、もちろん「噛まれる」も使われるが、一方、類似した韓国語の慣用句では、「먹히다 [食われる]」と「찔리다 [刺される]」は使われず、「물리다 [噛まれる]」が一般的である。また、気を付けている「このからだ」という名詞句を、韓国語訳では「言葉、行動などを慎重にする」の意の「자중하고 있다네 [自重しているのだよ]」という動詞句に変えて訳している。この訳例でも、原典の体言止めを述語句にした前述の特徴が確認できる。「蚤にも食われないように」と同義の韓国語のことわざ「돌다리도 두드려 보고 건너라 [石橋も叩いてみて渡れ]」があるが、それは用いず、直訳していることも前述の特徴と一致している。つまり、この訳例は、韓国語の慣用句が関与した語句の変換が行われ、韓国語の文章としては馴染みのない修辞を文脈で推測して意味を伝えるため、自然な韓国語の動詞句の訳文を入れて説明しているのである。

韓国語の慣用句の影響が見られる訳例と異なり、文脈を説明する固有語に変える訳例も2例あった。「子故に迷う親心」(p.141)は、「자식을 생각하는 부모 마음에서 [子を思う親心で] (p.193)」と訳している。原典でもことわざの意味のように「子を思う心のあまり、正常な判断力を欠いて迷うのも親心」のため、天河屋の義平が敵討ちを漏洩するのではないかと危惧する忠臣たちの場面である。しかし、韓国語訳では、「생각하다 [思う、考える]」の「誠意を見せ、真心を注ぐ」という意味のみが残り、「迷う」心は表れないのである。上記した原典の文脈は、続く韓国語訳で「그냥 대사를 누설하지 않겠는가? [そのまま大事を漏洩しないだろうか]」を加えて訳すことで補っている。

また「親の恩、子を持つて知るといふ」(p.146)は、「부모의 은혜는 자식을 낳고 나서 안다고 하는데 [父母の恩恵は子を産んでから知るといふ] (p.201)」と訳しているが、この訳例にも、類似の韓国のことわざ「자식을 길러 봐야 부모의 사랑을 안다 [子を育ててみてこそ父母の愛を知る]」は用いず、直訳の「자식을 가지다 [子を持つ]」とも訳していない。その理由は、「자식을 가지다 [子を持つ]」の韓国語の意味が「妊娠する」と

いう言い回しのためである。自然な韓国語訳をするなら「기르다 [育てる]」を語句に入れるべきだが、「낳고 나서 [産んでから]」という言い回しで訳し、「育てる」という意を付与した。以上の訳例は、日本語の固有語を韓国語の固有語に変える際、自然な韓国語とシーンの具体的な状況を説明するため、語句を変換した直訳の例であり、原典の意味が失われた部分を補充するため、韓国語訳では説明する訳文を追加する工夫もあった。

一方、日本語の固有語を韓国語の漢字語に変える例も見られる。「母親は、娘の顔をつく／＼と、うち眺め／＼、親の欲目か知らねども、ほんにそなたの器量なら、十人並みにもまさつた娘」(p.119)での「欲目」は、「自分の都合よく見る見方」という意味であり、継母の戸無瀬が見ても小波は秀でていることを述べる場面だが、韓国語訳では「부모의 욕심 [父母の欲心] (p.162)」と訳している。この訳例では、「親」は韓国語の漢字語の「부모 [父母]」に変えているが、韓国語では漢字語という認識は少なからう。その上、日本語の固有語の「欲目」を、韓国語の漢字語「욕심 [欲心]」に変え、「親の欲によるもの」というところに重点を置き、原典やことわざの意味は表れない。韓国語として自然さを考慮したのであろうが、ここは「자식 자랑은 팔불출이라지만 [子の自慢は八不出(愚か者の意)というが]」と訳す方がよからう。以上の原典のことわざの韓国語訳で、二つの日本固有語を、ともに韓国語の漢字語に語句を変え、原典のことわざや文脈の意味は失われても、韓国語としての自然さを念頭におき、訳した例と見ることができる。

「直訳+表現の変換」に宗教に関わる表現が影響したと見られる例もあった。「冥途の土産」(p.85)は、「저승길의 추억으로 [あの世(行く)道の追憶として] (p.110)」と訳している。「冥途」は、韓国語の漢字語「명도 [冥途]」も存在するが、仏教用語としての馴染みは薄く、韓国固有語の「저승길 [あの世(行く)道]」と変えた。また「土産」も韓国語の漢字語「추억 [追憶]」に変えている。この訳例は、意識したともとれるが、実は『新潮日本古典文学集成 浄瑠璃集』の『仮名手本忠臣蔵』の底本には「冥途の思い出」という異同も存在するため、連想しやすい言い回しだったと思われる。そのような言い回しは韓国にも存在するため、この例は直訳と考えてもよからう。しかし続く原典には、切腹した勘平に原郷右衛門が「冥途のみやげに」(p.85)しろと連判状を出し、勘平が署名し血判を押す場面もあり、この韓国語訳では、連判状が土産であることが分かるように「저 세상에 가져갈 선물로 하게 [あの世に持って行く土産にしてください] (p.111)」と訳している。問題は、仏教などの宗教に関する語句を訳す場合、直訳が困難であるという点だ。ことわざの韓国語訳ではないが、「鬼よ、蛇よ」(p.80)、「天魔が見入れし」(p.83)を、韓国語訳では「이 악마야! 사악한 놈아! [この悪魔! 邪悪なやつめ!] (p.104)」、「무슨 귀신이 씌었느냐? [なんの鬼神に取りつかれたか] (p.108)」と訳している。これ以外にも多数の訳例を検討する必要があるが、ここでは紹介に留め、他の論考で取り扱う。

直訳でも意味は伝わるが、助詞を句に変えて強調する効果を得た訳もあった。「花は桜木、人は武士」(p.141)は、「꽃 하면 벚꽃, 사람 하면 무사」[花(と) いえば桜花、人(と) いえば武士] (p.194)と訳し、主格助詞「は」をそのままに直訳も可能だったが、韓国語訳では「하면 [(と) いえば]」という句に変え、より限定するニュアンスを付けている。

最後に、原典で利用したことわざの語順のまま訳した1例を見てみよう。「人と馬には、乗つて見よ、添つて見よ、と申せば」(p.142)は、「사람은 사귀어 보고 나서 말은 타 보고 나서 안다고 하지요」[人は付き合ってみて馬は乗ってみて知ると言いますでしょう] (p.195)と訳し、原典ではリズムのためことわざを倒置して使った箇所を、韓国語訳ではことわざの語順に従って直訳している。

以上のように、『仮名手本忠臣蔵』におけることわざの韓国語訳の中で、直訳しつつも「表現の変換」があった訳例を分析した。分析の結果、「表現の変換」の様相として、日本語と韓国語の特徴を活かし、名詞や名詞句を述語句に訳した訳例、韓国語の慣用句や自然な韓国語として漢字語や固有語が関与し、表現を変換した訳例があった。そうした韓国語訳では、原典の解釈や文脈が関係し、ことわざの意味を失う訳や解釈を変える訳もあった。しかし、ことわざの意味を失うことを防ぐため、文章が付け加えられ訳されるという工夫もあった。さらに、分析の成果をふまえたうえで、韓国語訳の対策案の提示をも試みた。なお、新たな問題として、宗教関連語などの固有語の訳の困難さを見出した。「直訳」の形式には、「表現の変換」とともに、「表現を追加」する訳も見られ、それらは、3.3で検討する。

3.3 直訳戦略 (2) —その多様化として「表現の追加」

原典の文脈でことわざを説明する原文を直訳した1例がある。原典には、ことわざを利用した「冬は日陰、夏は日おもて」(p.29)のあと、「よけて通れば門中にて、行きがちがひの喧嘩口論ない」が続く。それが韓国語訳でも、「겨울에는 응달을 여름에는 햇빛 비치는 곳을 골라 피해 다니면, 그쪽을 지나는 사람이 별로 없기 때문에 사람들과 부딪쳐서 싸움이나 말다툼이 일어나지 않는 법」[冬には日陰を、夏には日差しが照るところを選び、避けて通れば、人があまりいないため人とぶつかって喧嘩や口論が起こらないもの] (p.95)と直訳した。この韓国語訳では、「冬」と「夏」に、時間を表す助詞「에 [に]」を追加し、「日おもて、よけて通れば」の訳を、「햇빛 비치는 곳을 골라 피해 다니면 [日差しが照るところを選び、避けて通れば]」としている。「日おもて」の名詞句を、韓国語訳では「햇빛 비치는 곳 [日差しが照るところ]」という述語句にしたうえで、「을 골라 [を選んで]」を追加し、文脈を明確にする訳にしている。このように、直訳、または直訳に表現の変化を加えつつも、「表現の追加」を行い、文脈を強化する効果を得る訳がある。

加古川家に訪れた許嫁の力弥に逢いたがる娘の小波のため、仮病でそれを叶えさせようとする戸無瀬は、「お主と持病には勝たれぬ」(p.24)といい、お使いの伝言を引き

受ける役を小波に譲る(2段)。その韓国語訳「남편하고 지병에는 도저히 당해 낼 수가 없지 [夫と持病には到底かなうはずがない] (p.29)」は、「도저히 [到底]」を追加し、伝言を受け取る役を譲ることがいかに仕方ないことであることを強調させる。続いて登場した力弥の描写で、「水を流せる口上」(p.26)を、韓国語訳では、「물 흐르듯 막힘이 없는 전갈을 듣고 [水が流れるように滞りが無い傳喝を聞いて] (p.31)」と訳している。原典では、ことわざの「立て板に水(を流す)」を利用した修辭で力弥の器量のよい口上を描写しているが、原典でことわざの「立て板に」の箇所が省略されたため、「물을 흐르게 하는 [水を流れるようにする]」のみ直訳しても意味が伝わらない。しかし、韓国語の慣用語「말이 물 흐르듯 하다 [ことばが水の流れるようだ]」を利用し、さらに「막힘이 없는 [滞りのない]」を追加して器量の良さを際立たせている。

鶴が丘八幡宮で高師直と不穏な事件があり、明日の城中で師直を斬る決心をした若狭之助は、力弥の伝言を聞いていた。力弥を帰したあと、加古川本蔵を呼び、自分の決心を伝える。その際、「ゐのしし武者よ、うろたへ者」(p.28)と世間に思われても、決行すると涙を流す。ここでは、ことわざの「後先見ず猪侍」を利用したが、「ゐのしし武者」のみ直訳しても意味は韓国の読者に伝わりにくい。そのため、ことわざの「後先見ず」を直訳する際、「後先」は自然な韓国語の「앞뒤 [前後ろ]」に変え、「見ず」は「구별 못하는 [区別できない]」に変えたうえで、「무모한 [無謀な]」を加えることでより世間の非難を強化した訳にしている(「앞뒤를 구별 못하는 무모한 멧돼지 무사 [前後ろを区別できない無謀な猪武士] (p.34)」)。

6段の勘平にお軽の母は、「まさかの時は切り取りするも侍のならひ」(p.75)と言い放つ。この韓国語訳は、「다급해지면 사람을 헤쳐서라도 돈을 취하는 것이 무사의 습관 [多急になると(切羽詰まったら)人を害してでも(殺してでも)お金を取る(取る)のが武士の習慣] (p.97)」と訳している。ことわざの「切り取り強盗も武士の習い」を利用した修辭であるが、原典では「強盗」は省略され、「切り取り」という名詞句を、韓国語訳では、「사람을 헤쳐서라도 돈을 취하는 것이 [人を害してでも(殺してでも)お金を取る(取る)のが]」と述語句に変え、さらに「돈 [お金]」を加えて訳している。それは、「人を斬り殺したり、強盗したりする武士は珍しくない」のに、自分の妻であるお軽が遊郭に勤め奉公する、つまり売られていくことなど恥に思わなくてもよい(「女房売つて恥にはならぬ」)という場面であるため、韓国語訳では、敵討ちに必要なお金のため手段を構わず金を工面しなければいけない勘平の立場が分かるように「돈 [お金]」を入れたのであろう。

上述した敵討ちをしないとさせるため、放蕩する7段の由良之助が、敵討ちは「人參飲んで首くゝるやうなもの」(p.93)という場面は、韓国語訳では、「마치 약으로 인삼을 사서 보신한 후에 목을 매달게 된다는 것과 같은 어리석은 이야기지 [まるで薬として人參を買って(飲んで)補身(元気を補う)した後首を吊るようになることと同じ馬鹿馬鹿しい話だ] (p.122)」と訳している。原典の拍子のよいたとえの言い方を、韓国語

訳では、「마치 약으로 [まるで薬として]」人參を「사서 [買って]」、「보신한 후에 [補身したあと]」、つまり人參を強壯剤として服用して自分で首を吊るような「어리석은 [馬鹿馬鹿しい]」話だと、解釈の文を多く加え、それを訳したものになっている。この韓国語訳は、十分な意味を伝えようと詳しい状況は伝えるが、原典文脈の軽快さが失われ、くどくて長い説明風の文体となった。

原典の文脈を強調するため、韓国語訳に擬態語を追加した例もあった。「あいた口ふさがれもせず」(p.35)では、「놀라서 떡 벌린 입을 다물지 못한 채 [驚いてあんぐりと開いた口を塞ぐことができないまま]」(p.43)」と韓国語訳する際、擬態語の「떡 [あんぐりと]」を加えて驚いた様子を強調した。

「どちやう踏む足つき、鷺坂伴内」(p.38)の韓国語訳の「백로가 미꾸라지를 밟듯이 살금살금 사기사카반나이가 나타났다 [鷺が泥鰌を踏むようにこっそり鷺坂伴内が現れた]」(p.48)は、「鷺」と「鷺坂伴内」の掛詞を活かし、「鷺が」を最初に出し、悪知恵でお軽から勘平を離したうしろから、「抜き足差し足の足取り」で近づく様子の描写を訳した。より鮮明に伝えるため、韓国語の擬態語「살금살금 [人目を盗んでひそかにするさま、こっそり]」を加え、原典の「足つき」を省略し、鷺坂の登場を表すため、「나타났다 [表れた]」を加えて訳している。

最後に、原典やことわざの表現を省略する例も紹介する。「君子はその罪を憎んでその人を憎まず」(p.127)は、「군자는 죄는 미워해도 사람은 미워해서는 안된다 [君子は罪は憎んでも人は憎んではならない]」(p.173)」と訳される。ここで脱落させた二つの「その」は、韓国語の言い回しには「죄는 미워하되 사람은 미워하지 마라 [罪は憎んでも人を憎んではならない]」があり、「그 [その]」を訳に加えない方が韓国語として自然だと判断したのでらう。

以上、直訳と「表現の変換」とが同時に行われつつ、それを補うための原典の前後文脈を説明する表現、副詞や擬態語を追加した韓国語訳について考察した。「表現の追加」の様相として、副詞や擬態語の挿入は原典の文脈をより色鮮やかにし、また説明の追加では文脈を強調する効果が見られた。一方、説明が多く加わることにより、原典のリズム感を損なう文体になっている箇所もある。

3.4 直訳戦略 (3) — 「その他」

直訳の「その他」の形式には、①訳注 (4 例)、②括弧に説明 (4 例)、③挿絵 (1 例)、④四字熟語 (2 例)、⑤引用記号 (8 例)があった。まず、①訳注には、『礼記』、『三略』という故事の出典を記す例が 2 例あり、それは、研究者としての訳者が訳文を原典により忠実な形にするため、注釈書のような韓国語版を目指したからであろう。残りの 2 例は、直訳したことわざの説明を脚注で補った例である。それは、②括弧にことわざの説明を入れる 4 例と同様だが、その説明を、本文の中に入れるか、訳注として処理したかの違いはある。その様相を見てみよう。

・「祭の延びた六月のつごもり」(p.35) →

「마쓰리祭り(축제)가 연기된 유월 그믐날(주 21)처럼 [祭り(祝祭)が延期になった 6月晦日(注 21)のように] (p.43)」

(유월 그믐날은 오사카 스미요시 신사의 액막이 행사로 여름 마쓰리의 최후를 장식하는 성대함을 보여 준다. 그런 마쓰리가 연기되어 아무런 행사가 없는 그믐날이란 기대가 어긋나서 맥이 풀린 상태를 비유한 말이다. [注 21 - 六月晦日は大阪住吉神社の厄除け行事で、夏祭りの最後を飾る盛大さを見せる。そんな祭りが延期になり、なんの行事もない晦日とは、期待外れで拍子抜けの状態を例えた言葉だ])

・「石亀の地団駄」(p.142) →

「남생이가 분해서 발을 동동 구르는 것(주 59)처럼 [石亀が悔しくて地団駄をとんとん踏むこと(注 59)のように] (p.195)」

(기러기가 나는 것을 보고 남생이도 날려고 하지만, 남생이가 할 수 있는 일은 발을 동동 구르며 분해하는 것뿐이라는 의미로부터, 다른 사람이 하는 일을 흉내 내도 자기가 할 수 있는 일은 한계가 있다는 뜻으로 쓰인다. 자기 분수와 주제를 모르고 분해 하는 것. [注 59 - 雁が飛ぶのを見て亀も飛ぼうとするが、亀ができることは足踏みをしながら悔しがることしかできないという意味から、他の人がすることを真似しても自分ができることは限界があるという意味として使う。自分の身の程を知らず悔しがること])

ことわざ의 文化的な脈絡は説明なしには伝わりづらく、その説明が訳文の中では長くなるために訳注になる例や、原典がことわざの一部のみ利用した修辭でありながらも、元のことわざ의 意味を含み、原典文脈의 意味をも載せるため、訳文の中で長くなるため訳注になったと見られる。

・「鷹は死しても穂は摘まずと、たとへに」(p.60) → 「‘매는 굶주려도 이삭을 먹지 않는다’ (무사는 아무리 궁해도 절개를 굶하지 않는다) 라는 비유처럼 [武士はいくら貧しくても節をまげない] (p.79)」

・「優曇華」(p.62) → 「우담화 (인도에서 전설로 전해지는 상상속의 식물로 삼천년에 한 번 꽃을 피운다고 함.) [インドの伝説として伝わる想像の中の植物で、三千年に一度花を咲かせるという] (p.82)」

・「獅子身中の虫」(p.107) → 「사자의 몸에 기생하는 벌레 (같은 편으로 은혜를 입었지만 오히려 적을 이롭게 하는 자) [味方として恩恵をうけたが、むしろ敵を有利にする者] (p.143)」

・「提灯に釣鐘」(p.117) → 「초롱과 범종 (모양은 비슷해도 차이가 큰 것의 비유)처럼 [模様は

似ていても差異が大きいことの比喩」(p.160)』

直訳して括弧に説明した訳例は、訳文の流れで読み進めるに支障をきたさない程度の長さであるため、訳文の中に入れてのたろう。訳注に処理すると、読み進めるのを一度中断して訳注に目を向けざるを得ないため、やむを得ない訳例以外は、本文で説明していると窺える。それは直訳できず、意識した例にも共通している。

以上のように、直訳に引用記号を用いて訳注には出典をつける形式と、訳注でことわざ元来の意味や背景について説明を施した形式とがあった。訳文の流れで文脈の理解のため長い説明が必要な場合は、読み進めることを妨げると懸念したため、訳注にしたのたろう。また、直訳した上、括弧の中にことわざの意味を入れた例もあり、読み進めるに支障のない長さなら、訳文に括弧で説明を入れたのだと思われる。

さらに、文章による説明以外に、視覚的な挿絵を利用した訳例も見られる。原典の「いすかの贅ほど違ふといふも、武運に尽きたる勘平が」(p.84)は、「食い違い、齟齬」の意味をもつことわざの「いすかの嘴」から「술잡새 [いすか]」の挿絵と「술잡새의 부리 (그림 17 참조) 처럼 어긋나 버린 것인 이 간폐이 무운이다 되었다는 것 [いすかの嘴 (挿絵 17 参照) のように食い違ってしまったことは、この勘平の武運が全部尽きたということ]」(p.108)」としている。訳文の「술잡새의 부리 [いすかの嘴]」のみでは、「술잡새 [いすか]」やその嘴の形が分からない人には理解が難しいため、説明や注が必要な箇所を挿絵から連想させる形式にした工夫と考えられる。

漢字文化圏の日本語と韓国語で使用される四字熟語には、使用の相違があるため、訳す場合もそれに関わる問題が生じる。「九牛が一毛」(p.150)は、「구우일모九牛一毛 (많은 양에 비해 지극히 작고 하찮은 것) [九牛一毛 (多くの量に比べて極小さくつまらないもの)]」(p.207)」と訳した。「구우일모九牛一毛」の意味が伝わりにくいため、括弧に四字熟語の説明を入れたのである。また「螢を集め、雪を積むも、学者の心長きためし」(p.156)は、「반딧불이를 모으고 눈을 쌓는 형설지공螢雪之功 도 학자의 느긋한 마음의 한 예다 [螢を集め、雪が積もる螢雪之功も学者ののんびりしたところの一例だ]」(p.114)」と訳された。四字熟語の「螢雪」を説明した原典「螢を集め、雪を積む」韓国語の四字熟語「형설지공 [螢雪之功]」を再び加え、学者の「心長き」の例につなげた。しかし「형설지공 [螢雪之功]」は「苦勞して學問に勵む」という意味だが、9段の時間設定である冬と雪、以後展開する夜に作っておいた雪の五輪塔は、仇討ちを準備する由良之助や力弥の気持ちを例える意味に変わるのである。

最後に、引用記号の利用について見てみよう。前述した「嘉肴ありといへども、食せざればその味はひを知らずとは」(p.13)の韓国語訳「“산해진미가 있어도 먹어 보지 않으면 그 맛을 모른다” 라는 말이 있다 [山海珍味があろうとも食べてみないとその味を知らない] という言葉がある」(p.11)」には、韓国語の直接引用記号「”」が使用され、段の冒頭の語りの聞かせ場として、ことわざを引用して語る。このような引用記号の

使用は、ことわざや詩歌などの引用、それを地の文の登場人物のセリフの中に表す場合に利用する。特に前者は、訳書という書物で『仮名手本忠臣蔵』に接する読者に舞台芸能として語り箇所を認識させる工夫であった。しかし、上記の例以外では、間接引用記号「」を使っている（他の形式と併用して7例）。また、記号の漏れも2例確認できるため、細かな校訂が必要であることが確認できた。特例として、「内にはかりゐる者を井戸の鮎ぢやと言ふたとへがある」(p.43)は、『仮名手本忠臣蔵』の特殊な文脈での使用で、元來のことわざは「井戸の中の蛙（大海を知らず）」だが、原文では「井戸の鮎」としているため、韓国語訳でも「대체로 당신처럼 집안에만 있는 자를 가리켜 ‘우물안의 붕어’라고 하지 [大概あなたのように家の中にはかりゐる者を指して「井戸の中の鮎」という] (p.56)」としている。その訳文は、韓国語のことわざとしても「우물안 개구리 [井戸の中の蛙]」があるため不思議な表現だが、本作での特殊な表現であるから引用記号を使ったと読者は理解できるだろう。

3.5 直訳の最難関、掛詞と韓国語訳の戦略

「直訳」や「表現の変換」、「表現の追加」でも、掛詞の韓国語訳について言及した。和歌の枕詞、序詞、掛詞の韓国語訳を考察したパク・イルホ（2013）では、「掛詞は、いわば隠蔽的表現構造を作るものであるが、翻訳においてはこの構造がくずれ、原作なら吟誦の中でおのずと重層の意味が現われるといった美的快感は得られない」という¹⁶。『仮名手本忠臣蔵』の韓国語訳ではいかに訳しただろうか。

浮世とは. 誰が言ひそめて. 飛鳥川. ふちも知行も瀬と変り. よるべもなみの下人に. 結ぶ
えんやの誤りは. 恋の枷杭加古川の. 娘小波がいひなづけ. 結納も. 取らずそのまゝに, (p.108)

‘덧없는 세상이라고 누가 말했던가, 아스카가와飛鳥川’ 저 아스카가와 강물의 깊은 곳도 여울이 되듯
이 녹봉도 못 받게 되어 의지할 데 없는 장인의 자식과 맺어진 연이구나. 연야한간의 잘못으로 순조로
울 사랑이 방해받은 가코가와혼조의 딸 고나미가 약혼 예물도 주고 받지 않은 채 버림받았다고 슬피하
기에, (p.146)

8段の道行の冒頭では、原典の注釈にも指摘があるように、「世の中はなにか常なるあすか河昨日の淵ぞ今日は瀬となる」¹⁷による修辞で、「将来の成り行きはわからない」という意のことわざの「飛鳥川のふちせ（明日はふちせ）」と、「世の移り変わりが激しい」という意のことわざの「ふちは瀬となる」とが抽出できる。この韓国語訳では、「‘덧없는 세상이라고 누가 말했던가, 아스카가와飛鳥川’ [「儂い世の中とは誰が言っていたのか、飛鳥川]」と成句の引用のように処理し、「저 아스카가와 강물의 깊은 곳도 여울이 되듯 이 녹봉도 못 받게 되어 [あの飛鳥川の川水の深いところも瀬になるように、禄俸（俸禄）ももらえなくなり]」となっている。掛詞の「ふち（淵・扶持）」の韓国語訳は、「淵」を、

固有語の「연못 [沼よりは小さいが、広く深いところにたまっている水]」を利用するより「강물의 깊은 곳 [川水の深いところ]」と説明する訳文にし、「扶持」が「少なくなった」という文脈の「瀬と変り」は、「늑봉도 못 받게 되어 [俸禄をもらえなくなり]」と訳し、日本語の原典にある同音のリズムがなくなっている。同音異義語の多い日本語の特徴が活かされない、修辞の魅力がなくなった訳文になった。これはパク・イルホの指摘とも一致する。

「主の威光の召しおろし、鶴のまねする鷺坂伴内」(p.32) では、ことわざの「鶴のまねする鳥」を利用し、「鶺鴒」を「鶴」に、登場人物の「鷺坂伴内」を掛ける修辞のため「鳥」を「鷺」に変えている。原典の「鶴のまねする鷺」を韓国語訳では、掛詞が訳しにくいいため、「주인의 흉내를 내며 빠기는 사기사카만나이 [主人の真似をしながら威張る鷺坂伴内] (p.39)」と、「鶴」を「주인 [主人 (主君)]」に変え、「흉내를 내며 빠기는 [真似をしながら威張る]」というように「빠기는 [威張る]」を追加し、鷺坂伴内の仮名をハングル表記するのみで「鷺」を脱落させる訳にしている。つまり、「真似する鷺坂伴内」の文脈は訳し、前節を受けて「威張る」を追加して師直の權威に肖ろうとする鷺坂伴内を描写するも、修辞の面白みはなくなる。

以上のように、掛詞の訳は修辞の魅力を失い、表現の省略や説明の訳に留まっている。しかし、韓国語訳をする際、韓国語の表現を追加することで、逆転して訳文の中で韓国語の掛詞が生じる例も存在し、訳の可能性をも見せている。

原典の「行儀作法は犬子を、屋根へ上げたやうで、さりとは / \ 腹の皮。」(p.32) の韓国語訳は、「그 예의범절이 개관인 것은 마치 강아지를 지방에 올려놓은 듯 어쩔 줄 모르는 모양 같아서 뱃가죽이 꼬일 정도로 참 우스운 일입니다요. [その礼儀作法がめっちゃくちゃのように、まるで子犬を屋根へ上げておいたように、どうすることもできない様子が、腹の皮がよれるほど誠におかしいですよ。] (p.40)」となっている。「개관인 것은 [めっちゃくちゃのように]」という韓国語の固有語の「개관」は、「상대, 행동 따위가 사리에 어긋나 온당치 못하거나 무질서하고 난잡한 것을 속되게 이르는 말 [状態、行動などが道理に合わず穏当を欠いて無秩序で乱雑なことを俗に言う言葉]」という意だが、「개 [犬]」が乱した「관 [場、場面]」という韓国語の比喩表現を使うことから、訳文において日本語の「犬子」との掛詞が生まれる特殊な用例である。これは、直訳しながらも、原典のことわざの語句から着想を得て、韓国語の慣用句を利用した訳語として使い、訳文の中で「礼儀作法は犬子を屋根に上げた」に「개관인 것은 [めっちゃくちゃ]」の修辞を加え、訳語の追加表現とことわざの直訳の語句とが掛詞をなす例である。この訳例は、訳者の語句追加や表現の選択によって訳文における修辞が豊かになる例として、掛詞の訳の参考にはならないだろうか。

参考までに、「意識」の例を一つ挙げてみよう。原典の「またも降りくる雨の足、人の足音とほ / \ と。道は闇路に迷はねど、子ゆゑの闇につく杖も、直なる心堅親仁、一筋道のうしろから」(p.65) のことわざ「子故に闇」を、韓国語訳では「자식 사랑에

눈이 멀어 감감한 밤길을 홀로 걷고 있는 노인은 그가 짊고 있는 지팡이처럼 올곧은 마음씨를 가진 완고한 사람이다. [子供 (に対する) 愛で目が眩み、暗い夜道を一人で歩いている老人は、彼がついている杖のように真っ直ぐな心をもった頑固な人だ] (p.85)」と訳している。そこで「눈이 멀어 [目が眩み]」と訳したことから、お軽のことを心配する(子供愛に目が眩む)父与市兵衛と暗い夜道へ進む(目が眩み暗い夜道を一人で歩く)与市兵衛とを重なり合わせ、原典の重層構造を訳文に表すことができた。なお、闇路のせいではなく、我が子を心配しすぎるため「つく杖」だが、与市兵衛が「杖」のような真っ直ぐな人柄であることを掛詞で原典では表している。その韓国語訳文では、「彼がついている杖のように」に、主語の「老人は」と「頑固な(律儀)人だ」とを加えて一筋な与市兵衛の人物像を巧妙に訳している。また、原典の「雨の足」に掛けて「人の足音」を出している。この韓国語訳では、「또 다른 발소리 [また別の足音]」という訳を入れ、物語の展開として直前の勘平と千崎の退場から与市兵衛の登場という演劇のシーン転換と、この後に出てくる与市兵衛を殺す盗賊になった斧定九郎を、一足先に喚起させる工夫をこらした。即ち、訳者が場面の展開を重視し、訳文の表現を選択し、また表現を追加した結果、表現の選択・追加から生まれる修辞が原典の重層構造や同音異義の趣向、演劇のシーン転換として人物登場退場までも表す訳文を可能にした。

以上の訳例では、掛詞の韓国語訳は翻訳の限界がありながらも、韓国語の表現の選択と追加によって、韓国語の表現同士の掛詞が生じ、重層構造や同音反復の趣向、読解の快楽としての訳の可能性を示した。

4 おわりに

本稿では、『仮名手本忠臣蔵』の韓国語訳における翻訳戦略とその形式について考察を行った。全99例を分析・選別した結果、重複する形式を含む形式別の用例総数は延べ104例であった。そのうち、66例が翻訳戦略として「直訳」を選択している。

考察した「直訳」の様相は、相応する韓国語のことわざの未使用や自然な韓国語よりもなるべく直訳した訳文がその文脈で伝わるよう忠実に直訳している訳例(I-1)が15例あった。この例では、訳文での解釈の変化や、原典のことわざの意味喪失などが起こってしまっていた。

直訳しつつも韓国語訳をする際、原典が変化したところがある。訳者は、訳文を具体化するための「表現の変換」と、訳文を多様化させるための「表現の追加」、そして「その他」の形式で工夫を加えた。まず、「直訳+表現の変換」(I-2, 19例)では、先行研究の指摘がある日本語の「名詞志向性」のあるところが、訳文では述語句に変換して訳されている。つまり、韓国語の「動詞志向性」が特徴として活かされた訳の形式であったと言える。また、原典の漢字語と固有語を韓国語の漢字語と固有語に変えて訳す形式もあり、日本語の固有語を韓国語の固有語に変えている例が顕著だった。これは、訳者の母語である韓国語の慣用句や言い回しが影響していることが判明した。

語句の変換があった韓国語訳は、原典の解釈や文脈に関係し、ことわざの意味をなくす訳や解釈を変えてしまう訳もあったが、訳者はそれを補おうと表現を追加した工夫もあった。さらに、分析の成果を踏まえ、訳の代案をも提示した。

そして、直訳しながら表現の変化とともに、原典の前後文脈を強調する表現や副詞、擬態語を追加した形式も見られた (I-3, 9例)。追加の様相と効果として、副詞や擬態語の挿入は原典の文脈を鮮明にし、また説明の追加では、文脈を強調する効果が見られた。一方、説明が多く加わることにより、原典のリズム感を損なう説明風の文体になっている箇所もある。

また、「その他」の方式 (I-4, 23例) として、①訳注、②括弧に説明、③挿絵、④四字熟語、⑤引用記号があった。出典の訳注とともに、ことわざの意味と文脈の解釈を訳注に入れる例から注釈書のような訳書を目指したことが窺える。ことわざの意味と解釈を載せる際、訳注は長く説明を要することわざに多く、括弧に説明する例は短く読み進めやすさを考慮した箇所に使われるという特徴があった。また、ことわざを文章で説明するよりも、視覚的なイメージを提示する挿絵の形式も1例あった。語り物の聞かせ場の多い各段の冒頭には、詩歌やことわざに引用記号を使って引用した形を取っている。それは、訳書という書物で『仮名手本忠臣蔵』に接する読者に舞台芸能として語り箇所を認識させる工夫であったと思われる。引用記号を使用した特例としての1例もある。それは、原典の直訳では韓国語のことわざと異なる言い回しで馴染みのない表現になるため、直訳して引用記号を使ったのであった。

最後に、掛詞の韓国語訳については、原典の魅力を損なう訳でしか対応できないという指摘があるが、これは『仮名手本忠臣蔵』の訳文にも共通する。しかし、一部の例では、訳者の韓国語の表現の選択と追加によって、韓国語訳文で韓国語の表現同士の掛詞が生じることにより重層構造が生まれ、同音反復の趣向や読解の快楽の可能性を提示した。これは、訳者の翻訳戦略と訳語選択の重要性も示唆する。

本稿では、直訳できず意識する34例と省略の4例の検討については、紙幅の都合で行えなかった。また、掛詞の韓国語訳の更なる考察、固有語の韓国語訳の問題、主語省略の頻度の差、誤訳や対策案の提示など、『仮名手本忠臣蔵』の韓国語訳には検討の余地が多く残されている。これらは今後の課題としたい。

注

- 1 鄭ヒョン (2013) 「韓国における日本近世古典人文学資料の翻訳出版および研究の動向」 染谷智幸・崔官編『日本近世文学と朝鮮』, 勉誠出版, p.34.
- 2 近世文学研究者である。論文としては、崔官 (2013) 「壬辰倭乱 (文禄の役) と日本近世文学」 染谷智幸・崔官編『日本近世文学と朝鮮』, 勉誠出版, pp.46-61.
- 3 野村伸一 (2007) 「翻訳の世界 - 朝鮮語と日本語のばあい」 韓国・朝鮮文化研究会『韓国朝鮮の文化と社会』6号, 風響社, p.149.

- 4 油谷幸利 (2002) 「誤訳に基づく日韓対照研究」『言語文化』5 (1), 同志社大学言語文化学会, p.75.
- 5 오경순 [オ・キョンスン] (2010) 『번역투의 유혹 [翻訳套の誘惑]』 이학사 [イハクサ]
- 6 박일호 [パク・イルホ] (2013) 「와카 (和歌) 의 한국어역에 있어서 수사 (修辭) 의 번역 - 마쿠라코토바 (枕詞), 조코토바 (序詞), 가케코토바 (掛詞) 를 중심으로 - [和歌の韓国語訳における修辭の翻訳 - 枕詞、序詞、掛詞を中心に -]」『일본학보 [日本学報]』97号, 韓国日本学会, p.242.
- 7 山本邦彦 (2001) 「『仮名手本忠臣蔵』七段目の翻訳をめぐって—ドナルド・キーンの英訳とルネ・シフェールの仏訳—」『立命館経済学』50 (5), 立命館大学人文科学研究所, p.565.
- 8 岩上はる子 (2015) 「F. V. ディキンズと日本文学 —『仮名手本忠臣蔵』の翻訳について—」『英学史研究』48号, 日本英学史学会, pp.1-16.
- 9 乙葉弘・鶴見誠 (1960) 『日本古典文学大系 浄瑠璃集 上』岩波書店
- 10 小池清治他 (2007) 『日本語学キーワード辞典 (新装版)』朝倉書店, p.177.
- 11 長友千代治他 (2000) 『新編日本古典文学全集 浄瑠璃集 仮名手本忠臣蔵・双蝶蝶曲輪日記・背山婦女庭訓・碁太平記白石嘶』小学館
土田衛 (1985) 『新潮日本古典文学集成 浄瑠璃集』新潮社
藤野義雄 (1974) 『仮名手本忠臣蔵 解釈と研究 (上)』共信社
——— (1975) 『仮名手本忠臣蔵 解釈と研究 (中)』共信社
——— (1975) 『仮名手本忠臣蔵 解釈と研究 (下)』共信社
乙葉弘・鶴見誠 (1960) 『日本古典文学大系 浄瑠璃集 上』岩波書店
- 12 尚学図書編 (1982) 『故事・俗信ことわざ大辞典』小学館
- 13 韓国国立国語院 『표준국어대사전 [標準国語大辞典]』 <https://stdict.korean.go.kr/main/main.do> 2021年7~10月に閲覧。
- 14 賈恵京 (2007) 『改訂版日韓類似ことわざ辞書』白帝社, p.86.
- 15 金恩愛 (2003) 「日本語の名詞志向構造と韓国語の動詞志向構造」『朝鮮学報』118号, 朝鮮学会, p.67.
- 16 박일호 [パク・イルホ] (2013), 上掲書, pp.242-243.
- 17 小沢正夫, 松田成穂校注・訳 (1994) 『新編日本古典文学全集 古今和歌集』小学館, p.354.

参考文献

日本語資料

- 岩上はる子 (2015) 「F. V. ディキンズと日本文学 —『仮名手本忠臣蔵』の翻訳について—」『英学史研究』48号, 日本英学史学会, pp.1-16.
- 乙葉弘, 鶴見誠 (1960) 『日本古典文学大系 浄瑠璃集 上』岩波書店
- 小沢正夫, 松田成穂校注・訳 (1994) 『新編日本古典文学全集 古今和歌集』小学館

『仮名手本忠臣蔵』に使われたことわざの韓国語訳—直訳戦略とその形式— (高 永珍)

- 小池清治他 (2007) 『日本語学キーワード辞典 (新装版)』 朝倉書店
- 金恩愛 (2003) 「日本語の名詞志向構造と韓国語の動詞志向構造」『朝鮮学報』 118号, 朝鮮学会, pp.1-83.
- 尚学図書編 (1982) 『故事・俗信ことわざ大辞典』 小学館
- 染谷智幸・崔官編 (2013) 『日本近世文学と朝鮮』 勉誠出版
- 賈恵京 (2007) 『改訂版日韓類似ことわざ辞書』 白帝社
- 鄭ヒョン (2013) 「韓国における日本近世古典人文学資料の翻訳出版および研究の動向」 染谷智幸・崔官編 『日本近世文学と朝鮮』 勉誠出版, pp.29-45.
- 土田衛 (1985) 『新潮日本古典文学集成 浄瑠璃集』 新潮社
- 長友千代治他 (2002) 『新編日本古典文学全集 浄瑠璃集 仮名手本忠臣蔵・双蝶曲輪日記・妹背山婦女庭訓・碁太平記白石噺』 小学館
- 日本国語大辞典第二版編集委員会 (2002) 『日本国語大辞典 第二版』 小学館
- 野村伸一 (2007) 「翻訳の世界 - 朝鮮語と日本語のばあい」 韓国・朝鮮文化研究会 『韓国朝鮮の文化と社会』 6号, 風響社, pp.149-205.
- 藤野義雄 (1974) 『仮名手本忠臣蔵 解釈と研究 (上)』 共信社
- (1975) 『仮名手本忠臣蔵 解釈と研究 (中)』 共信社
- (1975) 『仮名手本忠臣蔵 解釈と研究 (下)』 共信社
- 山本邦彦 (2001) 『『仮名手本忠臣蔵』 七段目の翻訳をめぐって—ドナルド・キーンの英訳とルネ・シフェールの仏訳—』 『立命館経済学』 50 (5), 立命館大学人文科学研究所, pp.553-583.
- 油谷幸利 (2002) 「誤訳に基づく日韓対照研究」 『言語文化』 5 (1), 同志社大学言語文化学会, pp.75-92.

韓国語資料

- 崔官訳 (2007) 『일본명작총서 1 47인의 사무라이 [日本名作叢書 1 47人の侍]』 高麗大学校出版社
- 오경순 [オ・キョンスン] (2010) 『번역투의 유혹 [翻訳套の誘惑]』 이학사 [イハクサ]
- 박일호 [パク・イルホ] (2013) 「와카 (和歌) 의 한국어역에 있어서 수사 (修辭) 의 번역 - 마쿠라코토바 (枕詞), 조코토바 (序詞), 가케코토바 (掛詞) 를 중심으로 - [和歌の韓国語訳における修辭の翻訳 - 枕詞, 序詞, 掛詞を中心に -]」 『일본학보 [日本学報]』 97号, 韓国日本学会, pp.235-244.

Web 資料

- 韓国国立国語院 『표준국어대사전 [標準国語大辞典]』 <https://stdict.korean.go.kr/main/main.do> (2021年7~10月に閲覧)

